

なげなしのしかね

奈良工業高等専門学校
現代視覚文化研究会
2017年度 秋会誌

まえがき

フランク

どうも皆さんお待ちせしました！ 今ご覧になっているのが2017年秋会誌となります。9月より活動場所を新たに（詳細はげんしけんツイッター [@mnc_invc3] をご覧ください）心機一転部員一同日々創作に励んでおります！ なんといつても今回はいままでの会誌とは違い、年に一度の高専祭で全ての人へこの秋会誌を直接お届けすることが出来ます。ただ数には限りがあるのでできればお早めに、高専祭は二日間あり両日とも配る会誌の数は決めているので片方はいけないという人でも大丈夫です、部員一同お待ちしております！

話は変わりますがおそらく今回の会誌の前書きで僕の出番は最後となるでしょう。そう、げんしけんも代替わりの時期です。まあだからどうしたって話ですがね。会長が変わろうが部員の皆の作品の方向性が変わるわけではありません、げんしけんが無くなるわけでもありません、ずっと続いていきます。

そしてもう一つお話が。げんしけんはいままで同好会として部内で創作活動をし、それを外部へ発信するためのものは会誌だけでした。

ところがなんと今回の高専祭では高専祭実行委員会さんより正式に高専祭のポスターを作ってくれないかという依頼をいただきました。といっても僕は文章班なので、イラスト班の人と話し合っ「よしじゃあやってみよう」ということで依頼を受諾することにしました。ここまでは前回もお話しましたが、このたびようやく完成にいたりました。予定通りならポスターの左上に「現視研」の文字が入っているものと思われま。げんしけんにとっては会誌とは別に大きな

作品となります、是非一度ご覧ください！

それでは、長つたらしい前書きもこの辺にして、今回は部員の皆さんに直接お届けできるとテスト後の体に鞭打ちより一層力をこめて創作していました！ 高専祭げんしけんブースで直接お渡しできることを願って、どうぞ2017年秋会誌をお楽しみください！

もくじ

《小説》

- 1.三分の軌跡.....6
えのぐふで
- 2.Second邂逅した少女と犬.....9
キツタヌ
- 3.二人の衝突.....11
つじゅう
- 4.僕の色君の色.....13
如月吟
- 5.元同級生.....17
TEXTER
- 6.独り心地.....21
若葉
- 7.ある日.....25
猫にゃん
- 8.ウサギの脚.....26
みの
- 9.さんしょく.....31
箱庭氏

《イラスト》

1. ヴォルフガング
2. あっこどん
3. アント
4. 梶本
5. 如月
- 6,7. 猫にゃん

小説作品



三分の軌跡

えのぐふで

ぼつんと。一つの箱が置いてある。下から上にかけて、少しずつ幅が広くなっている、筒状の箱だ。一番上は紙で蓋がしてある。箱の側面をなでると、プラスチックのような感触が手に伝わってくる。指を強めに押しながら撫でると、キュツ、キュツ、と甲高い音が鳴る。この音がなんとも心地良い。ただ、こうやって感触や音を楽しむために、私はこれを用意したのではない。

その場から腰を上げ、台所に向かう。ガスコンロに置かれている、少々古めのヤカンを手に取り上の蓋を外す。水道に足を運び、適量の水を入れるために蛇口を軽くひねる。水の流れる音がヤカンの中で反響して、ゴオオオ、と音を立てる。小さなアパートの一室に居ながら、まるで洞窟の中にも入っているかのような気分させられる。

水を入れ終わったヤカンに蓋をして、ガスコンロにセットする。点火すると、青白い炎が美しく燃え上がった。

この水が沸騰するまでの数分間、他の人は一体何をして過ごしているのだろうか。テレビをつけたり、携帯を触ったり、はたまたこの後の準備をするのか。ただ僕は、そのどれにも当てはまらない。僕はただただ——待った。

椅子に腰かけて、眼を閉じる。ガスコンロから上がる炎の音、外で響く、車の音や人の声、はたまた虫の鳴き声まで。辺りで鳴る全ての音を受け入れ、その上であの音を待つのだ。あの甲高い産声を。ピイイ、と。

ヤカンから高い音が鳴る。水が沸騰した証拠だ。この音を、僕は待っていた。ガスコンロに向かい、熱くなったヤカンを慎重に掴む。

いよいよ大詰めだ。あらかじめ少し開けてあった箱の中に、熱々のお湯を流し込む。たちまちに湯気が立ち、僕の顔に当たる。この熱さが心地良い。

湯を入れ終わり、箱の蓋を再び閉める。熱でめくれ上がりそうになる蓋を、用意した箸で抑える。

携帯のタイマーを起動し、3分にセットする。

それでは、よいスタート。瞬間。玄関から扉をたたく音が聞こえた。普通ではない、荒々しいたたき方だ。

「おい、誰かいないか！ 人が倒れてるんだ！」

「……二分五十秒」

重苦しく腰を上げ、玄関の扉を開けに行く。扉を開けると、そこには青ざめた顔をした男性がいた。確か、隣の部屋に住んでいる人はずだ。

「お願いだ、ちよつと来てくれ！ そこで人が倒れてるんだよ！」

男性の指が指し示す方向を見ると、アパートの廊下の真ん中で倒れている女性がいた。

「あいつ、歩いている時に急に倒れやがったんだ。俺はとりあえず救急車を呼ぶから、なにか手当をしてやってくれねえか？」

「……………ええ、わかりました」

こんな適当な指示もない、と心の中で思いながらも、断りづらい空気に押され、淡々首を縦に振った。

「とりあえず、僕の部屋に運びます。ずっとここに置いておくのもアレでしょう」

「あ、ああ。頼む。俺、携帯取ってくるから！」

そう言う男性は、急いで自分の部屋に走っていった。

「あ、僕の携帯あります——」

その言葉は届かなかった。よほど焦っているらしい。ほとんど周りが見えてない。

「はあ……あと二分か」

女性を抱え、自室に戻る。女性を横たわらせ、呼びかけてみる。

「すみません、大丈夫ですか？」

「——ん、んん」

「知らない確認だと思っていたが、まさかの結果が得られてしまった。彼女の意識は、普通にあった。」

「……こ、ここは？ それに貴方は——」

「それはこつちのセリフですね。誰ですか、あなたは。倒れてたからここに運び込んだんですよ」

「そ、そうなんですか？ すみません、ご迷惑をおかけして」

「はあ……まあいいですけど、あなたは誰なんですか？ 答えてください」

「は、はい。私は、塚塚仮奈（ひめづかかりな）と言います。あの、こんなことを初対面の方に言うのは申し訳ないんですけど……」

「何ですか？」

「私を——助けてくれませんか？」

仮奈さんから、大まかな説明を受けた。簡単に言うと、彼女は追われているのだ。借金をしていた彼女の両親が突然蒸発し、彼女一人が借金取りに追われるハメになったようだ。そしてここまで逃げたところまで、つい眠ってしまったというわけだ。

「つい眠ってしまったとは、中々間の抜けた話だ。」

「……？ どうしました？」

「いえ、何でもありません」

しかし、事情を聞いた方がいいが、どうしたものか。助けるとしても、こんな普通の男にできることなどあるのだろうか。

「とにかく、身を隠せる場所が欲しいんです。お願いします、私をかくまってください」

「うーん。病院じゃだめですか？ ちょうどさっき、あなたが倒れてるのを見た人が、救急車を呼んだんですよ」

「いえ、病院で長時間拘束されては、あの人たちに見つかった時に逃げられません」

「なるほどね……」

「ちらりと手元の携帯に目をやる。」

「あと一分か……。よし」

とにかくこの場をどうにかするのが先決だろう。とりあえず、彼女を隠さなければ。

「わかりました。もうすぐ救急車も来ると思うので、とりあえず隠れてもらいます」

「え、ええ……。でも、一体どこに——」

「すぐそこですよ。あなたがぐらいの体格なら簡単に入れるでしょう」

「あと四五秒、時間が無い。」

「——まあ、ちよつと汚れますけどね」

「おい、救急車が来たぞ！ 早くお嬢さんを……って、あれ？」

息を切らして走ってきた男性は、目の前の光景にただ茫然としていた。それもそのはずだ。部屋に運び込まれたはずの女性が、どこにもいないのだから。

「そんな中で、自分は男性を快く迎え入れ、質問に答えた。」

「急に目を覚ましたと思つたら、脱兎のごとくどこかへ駆け出していつてしまってますね。とても元氣そうでしたよ」

「そ、そうなのか？ まあ、無事ならよかったです……」

「男性は少し唖ると、その言葉を受け入れてくれた。大人だ。」

「じゃあ、俺は隊員さんに事情を説明してくるよ。ありがとうな、協力してくれて。」

「いえいえ、困ったときはお互い様ですから」

「大人だな」

「いえ、まだまだ子供です」

「そう、まだまだ子供だ。こんな幼稚な嘘をつく人間が、大人であるはずがない。」

「男性が部屋を出てしばらくした後、携帯を取り出した。」

「三十秒過ぎてたか……」

「三分三十秒。タイマーの示す時間を見て、少しため息をつく。ま」

あ、三十秒程度なら問題はないだろう。

熱くなった筒の蓋を開け、見事にほぐされた麺と具が目に入る。と同時に、香ばしいにおいが鼻を襲った。

今すぐにでも箸を取り、食事に移りたい気持ちが沸き上がるが、その前にやるべきことがあった。

「すいません、もういいですよ！」

少し大きめの声で床に声を飛ばす。しばらくすると、一人の女性が部屋に入ってきた。誰であるかは、言うまでもないだろう。服は所々汚れている。

「ありがとうございます。助けてくださって」

「いえ、僕は何もしてませんよ」

実際、何かをしたわけではない。ただ、彼女に隠れてもらっただけだ。このアパートの——床下に。

「すいません、結構汚れましたよね。狭かったでしょうし」

「いえ、助けてくださっただけで私は充分です。服なんて、後で洗えばいいんですから」

「そうですか。それはそうと、お腹空いてませんか？ あんまり食べれてもいいでしょう」

「え、ええ。確かにそうですが……。さすがにそこまでしていただく訳には——」

「いえ、簡単なものなのですぐ作れます。食べてください」

そういつて、さっきできたカップ麺を彼女に差し出した。

「本当に良いんですか？ 助けてもらった上に、こんなものまで……」

「いいんですよ。さあ、食べてください」

「あ、ありがとうございます。いただきます」

彼女は、恐る恐る箸を取り、麺をすすった。一口食べると、枷が外れたように食べ進めていった。

「おいしい……、おいしいです」

「それは良かった」

元々自分用に作ったものだ。食べたくないはずがない。自分用に
もう一つつくるために、再び台所に向かう。

次の三分は、彼女と楽しくお話でもしようかと、そう思った

了？

Second邂逅した少女と犬

キツタヌ

私は、これから、君のためだけに、新しい演目を捧げよう。

しかし、君はこれを見たときに退屈だと感じるかもしれない。

本来なら在るはずがないモノだ。退屈に感じるのも仕方がないのかもしれないね。

客人の退屈は名折れだろう。道化の、役者の、歌い手の。

それから……。

しかし、御客人が目の前に居るのに何も披露しない、演じない、歌わない、語らない、綴らない、描かない。魅せようとしな。という事は在りえてはならない事だろう。

例え、拙くとも。

例え、その資格が無くとも。

目の前に御客人が居るのなら、全力を尽くした結果が退屈だとしても、何も成さなかった退屈よりは幾分かマシだろう。御客人が退屈だと感じて、創ったそいつが大声で好きだと言えるモノならば、この世の中数人には刺さるだろうサ。

つと御客人にはどうでも良い事だね。言い訳にもならないかもしれないが、言い出すと止まらない性分だね。

さあさあ御客人！

始まりますは、一つのお話。在りえるはずがなかったナニカですが、先に言っておこう。この話には、意味はあるけど教訓はない。

教訓を。教訓を。教訓を。教訓を。教訓を。教訓を。

人々は、口々にそんなものを求めるけどね。叫んでも無駄さ。どこにも在りはしないんだ。これにも隠された意味くらいあるけれど、教訓なんてお綺麗なものはありはしない。

それでもよければ、席に着いて聞くといい。

紅茶もコーヒーも緑茶だって望めば何でもある。

菓子も望めば、山ほどに。

どうせ、これは下らない。少女と犬の話だよ。

とある所に一人の女性がおりました。

彼女は少女の時に交通事故で目が見えなくなっていました。

—彼の公園にて—

女性はかつて犬と出会った公園に来ていました。

女性は懐かしい木々の声に誘われて来ました。

かつてあったベンチは新しいものになっていて、彼女はそれに座って懐かしいモノ達と話していました。

しばらくすると、誰かが来たように足音が近づいて来ました。

足音が止まると、息を呑む音が聞こえました。どうやら驚いている様子です。女性は人成らざるモノと会話しているのです。気味悪がられるのには慣れていました。しかし、普段は大人しいベンチの近くの大きな桜の樹が騒ぎ始めるので、近づいてきた人が誰が、何故、驚いているのかに気づきました。

「ああ、貴方はいつかの犬さんなのね」

「——ツ。覚えていてくれたのか」

「犬さんを忘れる事は難しいかな」

特殊な人だったからね。

犬にはそう続けて聞こえた気がしました。犬は、そう言えば、と話し始めました。

「あれからキミが最後に残っていた言葉をよく考えてみたんだ。だけど、やっぱり僕は犬だよ。僕を犬だ。と定義付けた人がいるからね」

犬はそう言い切りました。

「そう。じゃあ貴方はあの時と何も変わらずに犬さんなのね」

女性はただただ受け入れました。

「変わらずに。とは違うかも。キミも僕も成長しているからね」

犬は明るく言いました。

「ところで質問があるのだけれど……」

犬は躊躇いがちに言いました。

「ええ。長い間会っていないかったもの。お互いに聞きたい事はたくさん在るでしょう?」

「それもそうだね。たくさん在る」

「それで? 犬さんが一番聞きたかった事はなあに?」

「ああ、うん。その……」

犬は言い淀みます。

「それじゃあ、心が決まるまで別の話をしましょうか。大丈夫。時間はまだまだたつぷり在るもの」

「いや。いい。先に言うよ」

犬は深呼吸をして口を開けます。

「キミには僕は生者か死者どちらに感じる?」

「分からないわ」

女性は即答でした。

「私ね。この間墓地で知り合った人がいるのだけど、その人とお喋りしていたら、その人が実は幽霊だったって事に気づいたの」

「その人はどうなったの?」

犬は女性の話を断って聞きました。予想もしていなかった理由に興味を惹かれ、もはや自分の質問は二の次です。

「犬さんは本当に変わってないのね」

懐かしいわ。と女性は笑いました。

「その人はね、最期にThank you. って言つてどこかに行ってしまったわ。なんだが辺りが不思議な感覚に包まれたから、あれが成仏だったんじゃないかしら」

女性は懐かしそうに語ります。が、

「……え!? 英語圏の人だったの!? と言うか、キミ英語話せる様になったの!?!」

犬は驚きの連続です。

「いいえ。ロシアの方よ。ああ、でもその人が生きていた時はまだソビエト社会主義共和国連邦だったみたい」

「キミどこの墓地に行つていたの?」

女性は、ふふふ。と笑つて答えませんでした。

「変わらないわね」

「キミもね」

犬は、思わず溜息を落とします。随分と疲れた様です。

「私にとつては、犬さんが生きていようが死んでいようが、また、こうやつてお話出来ているから関係ないわ。私の目が不自由でないのなら、犬さんの生死を観測して定義付ける事は容易だけれど、私は生者と死者どころか無機物なんかの声も聞こえるから、今の私が一般的な生死を観測する事は出来ないわ。」

もし、この目が見えたのなら、私はきつと犬さんと一生お話す事も無かつたでしょうから、見えていてもいなくても、犬さんは私の中では生死の定義付けは無理ね」

どう? なんだか賢そうでしょ? と、ほほ笑む女性に犬は巡らせたい考えが馬鹿らしくなり、この件について考える事を止めました。なんて言つたつて、そもそも元凶である女性がどうでも良いといったのだから。

今日、この日は公園に居るのは二人。

了

二人の衝突

つじゅう

一人の青年が、部屋の中で迷っていた。

「死にたくない」

「生きたくない」

「どうして生きたくないの？ 生きることは辛いけど、生きることには希望がある。死んでしまえば何も残らない。まだまだ死ぬには早すぎるよ」

「どうしてそんなに単純な考えができるの？ 生き続けても絶望があるだけ。希望なんてすぐには来ない。希望が来るころにはもう時間が無い。どっちにしても死んだようなものだよ。生きる意味は生まれぬ」

「そんなことがどうしてわかる。生きてどうなるかなんて誰にもわからないだろう。そりゃあ、辛い絶望しか待つてないかもしれない。でも、だからと言って死んでもそれは変わらないだろう。死んでしまったら何も無い、だったら生きた方が得と言えるだろう」

「君の言うことこそわからないさ。死んだら何も無いだつて？ 死んでどうなるかなんて、生きている私たちには決して分かりえないだろう。死ぬのは生きている人からしたら怖い。けど、怖いことに挑戦することは、チャンスだろうって、みんな言っているじゃないか。それと一緒に。死ぬことだつて、チャンスと言える。生きている世界しか知らない私たちが、死ぬことに善悪を決めるべきじゃないだろう」

「死の善悪とか、僕はそんな話がいわけじゃない」

「それもそうか。まあ、要は死ぬことも悪くはないってことさ。」

「確かに善悪はないだろう。けど、人生どっちにしても死んで、一度死んだらもう戻れないだろう。だったら今はできる限り生き抜いている方が悪い方には行かないだろう」

「だけどそれは……」

「だとしても……」

「その考えは……」

青年の二つの意思は、そのあととずつと考えた。

人が生きること、人が死ぬこと。自分が生きる意味、死ぬ意味を。その答えはそう簡単にはでなかった。その答えにたどり着くまで、多くの時間を使った。その時間をただそのことに費やした。その間、自分が何をしていたかはよく覚えていない。けどまだ生きているということは、生きる最低限のことはしていたのだろう。

そして、青年は、答えとは言えなくとも一つの強い意志が芽生えた。

「僕は、死にたくない」

「私は、生きたくない」

「つまり僕は死にたくなくて、生きたくない」

「つまり私たちは、生きることも死ぬこともない道を行けばいい」

「そんな道はあるの？」

「わからない」

「その道にたどり着いたとして、それは僕らが望んでいるものなの？」

「わからない」

「結局わかってない。それじゃ最初とそんなに変わってないじゃないか」

「でも、私たちの意見は一つになった。だから、これが今の私たちにとつて一番幸せなことさ」

「今はそうだけど、未来の僕らは違うかもしれない」

「だったらその時考えればいい。ダメなことはビビって何もしないことだ。そんな人生送るよりは、馬鹿みたいに今を生きた方が損はない」

「馬鹿みたいに？」

「そう、馬鹿みたいに」

「だったら始めよう、馬鹿みたいなこと」

「ああ、はじめよう」

「死にたくないから」

「生きたくないから」

そうして男は、馬鹿みたいに人生を楽しみ始めた。馬鹿みたいなことをしたいから、馬鹿みたいなことをした。

それが正しいかは男にはわからなかった。けど、そんな馬鹿みたいに、生き急ぐように過ごしても、死にそうになることはなかった。そして、そうやって生き急ぐ程に、人生は忙しくなり、生きた心地もしなくなつた。

生死に関係なく目の前の問題に全力で臨むこと、それが男の求めた答えだつたのだ。

それから、長い時がたつた。青年は、男は、すでに老人となつていた。そして、だんだん忙しさもなくなり、生活に余裕がでてきた。その時、老人は考えた。

「最近、だんだん生きているという感じることが多くなつたな」

「そうだな」

「あのころは生きたくないと言つていたのに、いまではなんの不満も無い。不思議なものだ」

「しかも、それが死に近づくほど感じやすくなつてきているというのも、少し笑えてくるな」

「死にたくなくて生きたくない」と人生を送つていたのに、死が近づく」と生きたくないか。確かに変な話だな」

「ということとは、やっぱり死なないことは生きているということ、生きていないということは死ぬことなのだろうか」

「少なくとも、今の人間ではそこまでしか考えられないということだろう」

「それもそうだな。なんたつて、人生のほとんどを費やして考えて、実行してきたことだからな。これ以上の発見は、寿命が延びるとか、知能が上がるぐらいしないと出てこないだろう」

「じゃあ、これからどうする？」

「いままで散々忙しく生き急いできたわけだし、最後ぐらいゆっくり暇に過ごしてみるか」

「案外それも死んでなくて生きてないかもしれないな」

暇になつた老人は昔のことを思い出してみた。

「僕らも昔は真逆の意見だつたのに、随分仲良くなつたものだね」

「ああ。私たちが同じ意思を持てたからこそ、ここまで楽しく人生を過ごせたのだろう」

「……」

「……」

「結局、僕らはなんだつたのかな」

「一人の人間に二つの意思がある。変な気もするが、案外これが普通なのかもしれない」

「そういうものかな？」

「そういうものだろう」

二つの意思は、互いを確認し、少しの間考えることをやめた。

そしてまた、今の生き方を考え始めた。

「さて、明日は何をして暇を潰そうか」

「さつき暇な人生を過ごそうとか言つたばかりじゃないか」

「そういえばそうだった。難しいね、暇を過ごすつて」

「まあ、なんとかなるだろう。今迄みたいに」

「そうだね、今迄みたいに」

暇な老人と、その二つの意思は、暇を持て余したので、とりあえず寝ることにした。

「死にたくないから」

「生きたくないから」

僕の色 君の音

如月 吟

駅には目的地へ行きかう人の足音が絶え間なく聞こえる。僕の絵に目を向けてくれる人なんていない。

「……ハア」

ただ、溜息がこぼれるだけ。見向きもされない。僕の絵のために足を止めてくれた人は、誰もいない。ふと時計を見上げた。

「七時四十分。もう、帰ろ」

帰って、支度して、バイトに急ごう。そんな風に思っていた時だった。

「この絵はすべて、貴方が描いたんですか？」

帰り支度をしていた最中だったため、後ろを向いていた。振り返ると、女性の姿がいた。

「はい、そうですよ」

「すごく素敵です」

彼女の口からは絵に対する感想がこぼれた。その感想は色遣いが綺麗だとか、暖かい感じがするとか幼い感じのものだった。それでも、絵を見てくれたという事実はとても嬉しくなった。

「だ、大丈夫ですか！」

「どうしたんですか？ いきなりどうもって」

「だって、貴方が泣いてるから」

そんなことを言われ、頬に手を当てた。指先に湿ったような感覚があり、泣いていたことがようやくわかった。

「心配をかけてしまい、申し訳ありません。ただ、うれしかったものでつい」

そう、嬉しかったのだ。通りすがりの人が自分の絵のために足を止めてくれたことが。

「そうなんです。何事もないようで良かったです」

彼女は安心したかのように息を吐いた。そんな様子を見ると、彼

女は優しい人柄なのだなとわかる。

「……えっと、明日も来て良いですか？」

「はい、何時でもいらしてください」

当たり前障りのない返事を返し、彼女は去っていった。明日も来てくれる。このことが、とても嬉しく感じた。

七時四十五分、昨日彼女が来た時間を五分過ぎた。たった五分過ぎただけなのにソワソワしている僕がいる。そんな自分に驚いた。

「何時に来るかなんて決めてないのに」

もしかしたら、用事ができて来れなくなったのかもしれない。あの言葉は社交辞令で、本当は来たくないのかもしれない。頭に悪いイメージが一つでもよぎると、いくつも悪いイメージが浮かんできってしまう。今日はもう来ないのかもしれないと考えていると、

「ごめんなさい。少し遅れてしまつて」

彼女が目の前に立っていた。

「大丈夫ですよ。来てくれてありがとうございます」

本当は安心していい。本当に彼女は来てくれた。それに、時間については約束していなかったのに、謝ってくれた。

「今日は、私の秘密を見せます。こつちに来てもらえますか？」

「えっと、秘密ですか？ 昨日会ったばかりの僕に、ですか？」

少し不思議に思った。彼女と僕は昨日会ったばかりに秘密を教えなくてもいい。普通はそれなりに親しくなった間柄で見せるのではないか。何故僕なのだろうか。いろんな疑問が頭の中でグルグルと回っている。

「ええ、貴方なんです。秘密というほどのことでもないんですけど……」

「それに、貴方なら見せてもいいかなと思えるんです」

「わかりました。少し待ってもらえますか？ 店じまいしたいので」

「大丈夫ですよ。私も手伝いますね」

二人での片付けいつもより楽しく感じた。

驚いた。その一言しか出てこない。

「これが私の秘密です」

悪戯っ子のような笑みとシンセイザーに手をかけて、凛々しく歌う彼女の姿がよみがえった。昨日の優しくして誠実で人のよさそうな人からは想像もつかない、凛々しい姿、透き通った歌声。かつこよかった。絵を描いては販売しているこんな僕なんかよりも。

「また、聞いてみたいな」

聞いてみたい。描いてみたい。彼女の絵を描きたい。いつもはただ描いているだけ。でも今は、ただひたすらに彼女を描きたい。いろんな彼女を描きたい。駅で行き交う人に向けて歌う彼女、ひらけた場所と思うままに歌う彼女、いろんな彼女。そんな風に描きたいと考えていたら、居ても立っても居られず、スケッチブックと鉛筆、その他諸々を集めて絵を描き始めた。鉛筆の運びがいつもと違う。軽やかで、迷いが無い。イメージが湧き上がって、それがスケッチブックの上に展開されていく。その上から水彩絵の具を塗っていく。淡い色、濃い色、いろんな色が鉛筆画を色鮮やかに彩っていく。

「……できた」

いつもの画風とは違う、僕のイメージが詰まった水彩画。僕が描きたかった絵。こんな風に絵が描けるなんて思ってもみなかった。描いたら見せたくなるのは画家の性だろう。

「何て言ってくれるのかな……」

嬉しいと言ってくれるだろうか、気持ち悪いというだろうか。期待と不安が交錯している中、窓を見ると東の空が明るくなり始めた。

今日はこちらから訪ねてみよう。二日連続で彼女の方から訪ねてもらったのだから。そんな感じで駅へ向かった。

「何て言ってくれるのかな……」

向かったのは良いものの、絵についてどんなことを言ってくれるのか想像すると不安でたまらなくなる。批判が返ってくるか、軽蔑されるか。悪いイメージがさらに悪いイメージを呼び起こして、気分が悪くなる。足取りも悪くなる。

「……ハア」

溜息まで出る始末。どうしようかな、やっぱり見せないでおこうかな。なんて考えるようにもなった。確かに出来は今までの絵の中で最高の出来であった。でも、何の了承も得ずに絵のモデルにしてみました。やっぱり、何か言われるのかな。そんな風に考えながら歩いていると、彼女が昨日歌っていた場所に着いていた。

「絵描きさん。また、私の歌を聞きに来てくれたんですか？」

ついに、彼女が話しかけてきた。と言っても、彼女に会いに行くのが目的だから話しかけてくれるのは良かったのだが。

「え、えつとですね。その、あのー」

心の準備無しに会話が始まってしまったため、どのように会話すれば良いのかわからなかった。そのため、コミュニケーションも吃驚するくらいのもり具合になってしまった。

「ゆっくりでいいですよ。落ち着くまで待ってますから」

彼女の優しさに感動してしまった。本当に彼女は優しい人なのだと涙が出そうになったが、グツとこらえて深呼吸を行った。三回ほど息を吸っては吐くを繰り返し、

「待っていただきありがとうございます。今日訪ねたのは、この絵を貴女に見てもらいたかったからです」

そう言っ、彼女に深夜描き上げたあの絵を見せた。

「水彩画ですね。モデルは誰なんですか？」

「えつと。……貴女、です」

どんな風に言われるのかわからない。不安でたまらない。この場から逃げ出したくなった。

「一昨日見た絵とまた違っていても素敵に見えました。絵の中の私が生き生きと歌を歌っている、この絵の様に歌うことが私の夢

なんです」

「そうなんですか」

「私の夢を描いてくださって、ありがとうございます」

「……良かったあ」

素敵な感想を頂けて、そして彼女に嫌われなくて安心した。緊張や不安から解放されたためか、顔には安堵の表情が表れていた。

「どうかしたんですか？」

不思議そうに彼女は聞いてきた。

「いいえ、なんでも」

僕は、彼女にそう返した。

彼女と会ってから一か月が過ぎようとしていた。

「あの人、毎日の様に来てくれたなあ」

毎日ではないが、七時四十分頃に駅で僕の絵を見ては感想を言ってくれた。いくつかは印象が悪かったのかあまり良くない感想も頂いたが、それでも、絵を見てくれる人がいて嬉しかった。歌声が聞こえてきたときはこちらから訪ねて行った。そして、彼女の歌に感想を述べたこともあった。

「妙に信頼できるというか、なんというか」

彼女の人柄には根拠が無いのに信頼できる場所がある。明日もこの駅で会える。明日も絵の感想を言ってくれる。明日は僕が彼女の歌を聞こう。そんな風に思わせてくれるのだ。

「というか、何時からあの人のことを考えていたんだろう？」

彼女と初めて会ったのは一か月ほど前のことで、きっかけは僕が描いた絵だった。そして、彼女と親しくなっていた始まりは彼女がストリートミュージシャンであるという「秘密」を話してくれたことだ。それから、彼女のことや彼女の歌声、彼女の夢、彼女についていろんなことを考えるようになった。

「もしかして、あの人に恋しているのかなあ」

顔が急速に熱くなっていくのがわかる。急に恥ずかしくなり、ベッドの中で悶えていた。

「じ、自覚すると、恥ずかしいなあ……」

恥ずかしいが、それでも、僕にも人を好きになるという気持ちがあることが知れた。それが、嬉しかった。

「告白、しようかなあ」

告白をして良い返事なら嬉しいけど、悪い返事だったらどうしよう。もしかしたら、印象を悪くしてもつと酷いことになったらどうしよう。考えれば考えるほど悪いイメージしか出てこなくなった。

「……考えるの、止めよ」

僕も男の端くれだ。当たって砕けよう。そうして、夜が更けていった。

彼女が演奏している場所に向かった。そこには、以前には無かった人だかりができていた。彼女の歌声は透き通っていて綺麗だから、人だかりができるのも納得ができた。僕は、進化し続ける彼女の歌を聞いた。

「……綺麗だ」

声も、歌う姿も、何もかもが。

一時間後、彼女と僕の二人だけとなった。あの人だかり幻なのかと思うほどあっさり消えてしまった。

「絵描きさん。来てくれてありがとうございます」

「僕は貴女の歌声が好きだから来るんですよ」

伝えなきゃ。当たって砕けろ！

「今日は、だ、大事な話があるんです」

「大事な話、ですか？」

伝えないといけない。そう考えても、緊張からか過呼吸になってしまう。話すのが苦しくなってきた。

「大丈夫ですよ。貴方が落ち着くまで待っていますから」

あの時と同じ言葉。貴方の絵を見てもらったときにかけてくれた優しい言葉。僕はあの時と同じように、三回深呼吸をして、

「あなたの秘密を知ったとき、かつこいいなと思いました。自分には無い輝きを持つている貴女が」

「絵描きさんも私には無い輝きを持っていますよ」

「ありがとうございます。単刀直入に言いますね。あのときから、貴女のことが好きでした。付き合ってください！」

僕は頭を下げて、手を突き出した。もし悪かったとしても、後悔しないように伝えたかった。

「……はい！喜んで！」

その後のことはよく覚えていない。あまりの嬉しさに記憶が飛んでいるのだろう。それでも、僕の隣には彼女がいてくれた。これからもい続けてくれることを願う。だって、僕の絵と彼女の歌が僕たちを結び付けてくれたのだから。

終

元同級生

TEXTER

「じゃあ、今日のところも教えてよ」

「わかった」

僕たちは机で向かい合っていた。

しかし、僕と対面している女の子は半透明だった。

僕の名前は石川理、彼女は江島優。いつも僕たちはこうやって、放課後にその日の授業の復習をしているのだ。

と言うよりは、僕が一方的に教えている状態だが。

「やっぱり石川くんの説明は分かりやすいね」

「そうかな？ 教科書の言い方をちよつと変えてるだけけど」

満面の笑顔で礼を言う彼女に、僕は小さく首を傾げる。

そこまで感謝されるようなことはしていないと思いつつも、感謝されることは悪い気分ではない。

広げていた教科書をめくり、ノートに置いてある規定を彼女側に少し移動させる。ノートのどここのことを言っているのかを示しているのだ。

普通なら、彼女が自分で規定を動かす、いや、自分の指でなぞりながら解説を聞くものなのだろうか。だが彼女にはそれができない。なぜなら、彼女は人間ではないからだ。

いや、正確には、今は人間ではない、と言ったほうが正しいだろうか。彼女の身体は透けており、向こうの景色が見える。

幽霊。一般的にはホラーゲームに出てくるくらいだから、恐れられているのではないだろうか。

僕には、幽霊が見える。初めて見た幽霊が、この元同級生、江島さんだった。

当時は目の玉が飛び出るかと思った。なぜなら、そのとき江島さ

んは死んでいるはずだったのだ。

つまり、彼女は幽霊のようなものである。

と言つても、今の彼女を見ればわかると思うが、いじめなんかによる自殺ではない。

父親の浮気に激昂した母親に刺された、となぜか笑いながら教えてくれた。

自分には関係ないと思っているのか、あるいはそう思いたいののか。

「じゃあ、今日はここで終わり」

一声かけて、教科書とノート、筆記用具を鞆にしまう。

彼女は一瞬名残惜しそうな顔をしたが、僕の顔を見ると、
「じゃあ、また明日ね」
と手を振った。

翌日。国語が古典の問題を出してきたので、实例を見ながら学ぶために図書室で勉強することにした。

彼女は教室から動けないのではないかと心配したが、どうやら少なくとも学校内は自由に移動できるということだった。

不思議なものだ、彼女がいなければ僕は勉強目的で図書室なんか来ないだろう。彼女と過ごす時間が楽しい。僕も彼女に助けられている。

「ごめんね、古典はあんまり得意じゃないから分かりやすくはならないかも」

そんなことをさりげなく言うと、彼女は、じゃあ一緒に勉強して覚えようか、と笑った。

図書室には誰もいなかった。

カーテンで遮られた夕日がさしている。既に窓は閉じられているようだ。

手前の方の椅子を引き、そこに座る。彼女の分の席を引こうとしたが、要らないと断られた。

授業を受け続けたい、学校に居続けたいと願うところは生きていく人間らしいと思うが、こういうところは幽霊っぽい。

彼女はどちらの扱いを望んでいるのだろうか。

僕は本棚から古典の本を取り出した。純粋な古典文学の本というよりは、教科書のように多くの解説がついているタイプだ。

別に探した訳ではなく、適当に選びだした。

「え、そんな分厚い本使うの!？」

彼女は目を丸くして驚いた。

「いやいや、別に全部やるって訳じゃないさ」

流石に読破しようと思うと、夜が更けるどころか明けてしまうだろう。

たとえ彼女が大丈夫でも、僕のほうがもたない。

彼女は夜寝る必要があるのだろうか。

「じゃあ、始めようか」

「うん」

そんな疑問は、二人で過ごすうちに消えていった。

だが、跡形もなくなかったということはなかった。

「ここで終わりにしようか……」

室内に入らんとする夕日も優しくなってきた。外が直接見えないうから、普段より長居してしまったようだ。

「いつもありがとうね、わざわざ」

彼女は改めて礼を言う。

「大したことはないさ」

僕はそう返す。実際、僕は彼女と勉強するのが楽しい。面白い内容でなくとも、二人一緒なら大丈夫という気がした。

授業ノートと筆記用具を片付け、鞆にしまう。

借りた本を持って返しに行くと、すぐ横の本にしおりが挟まっているのを見つけた。

特に何という本ではなかった。そもそも、僕には古典で興味のある分野などない。

しかし、僕はふと、その本を代わりに持っていた。

幽霊についての話だったのか、それとも幽霊が出てくるだけの話だったのか。

古典が得意でない僕には、解説のないその本のすべてを読解することは適わなかった。

だが最初のしおりのページの最初の行、その文だけが、強く印象に残った。

次の日。いつものように、僕は余裕をもって登校する。

教室には、生徒がまだまばらにしかいない。自分の席に座り、今日の支度を机の中に入れる。

鞆を棚に起きに行こうとして、ふと、教室の後ろを見る。

一瞬江島さんが見えた気がしたが、すぐに何も見えなくなった。

昨日読んだあの本の影響であった。

本のストーリーはどうでも良かった。だが、その本には気になる記述があったのだ。

「輪廻転生に抗う魂である幽霊は、世界の仕組みを狂わせる。成仏させるべきだ」と。

僕は輪廻転生が本当だと信じ切っているわけではないし、成仏することが幸せだとも思っていない。

だが、成仏というか、この世から幽霊が消えないのには何かしら理由があると共感するのも事実だった。

電車に乗っているとき、霊に会うことはない。ひん曲ったガードレールの元に花が添えてあっても、その近くで誰かを見ることは

できなかった。

それなら、彼女が成仏する条件は何なのか。聞いてみないと分からないが、彼女はおそらく教えてくれないだろう。

きつと「僕と一緒に居たい」とか言つて、拒否するに違いない。

別に別れたいという思いはない。ただ、もしそうやって本来の流れに戻すことが正しいなら、僕がこうやって昨日までやってきたみたいにするのと付き合ってしまうのは逆効果だと思った。

付き合つてしまう、という自分の形容に鳥肌が立った。何か悪いことをしている気分だった。

この朝、今、僕は彼女を見ようとしなければ見えなくなることを知つた。

そうしなければならぬ気がした。見えていれば話しかけてしまふ自信があつた。

だが、僕が反応してしまえばわざわざ無視している意味がなくなつてしまう。僕は正しいことを優先すべきと考える性格だった。

窓の外にはいつも通りの青空が広がっている。

吸い込まれそうな不安の快晴だった。

いつもより時間が遅く感じる。

更に言うならば、僕と喋ることがなくなつて互いに忘れられたとしても、彼女が自分で自分の問題を解決できるのかは分からなかつた。

自分で起こした問題かもしれないのに、僕はその事後を見守ろうとは思わなかつた。

心配に思う心と行動は連動しているようで、まるつきり矛盾していた。

その日は夕日の中を逃げるように帰つた。

彼女のことを考えると心が傷んだ。忘れることができるのは、もう少し先の話かもしれない。

たつた一冊の本に従う僕はとても滑稽だった。

あれから一週間経つた。

僕はもはや無心になつていた。

放課後残ることもなくなり、図書室に行くこともなかつた。

周りにはどう見えていたのだろうか。なんとなく落ち込んだ表情をしていた気もするし、普段通りだった気もする。

まるで江島さんなんて最初からいなかったみたいに振る舞つた。

もとより、僕が死んだ人と会話できるなんて明かしてはいないが、普段以上に気を使つた。

そろそろ諦めただろうか。

僕は後ろを振り返つた。

その景色は、ある意味で予想通りだった。

彼女は、相も変わらずそこに浮いていた。

まるでこの一週間なんてなかつたみたいに、そこに佇んでいた。

彼女は待つていたようだった、一週間という長い時間を。

彼女には、僕がこうやって無視している理由を説明してはいない。

それなのに、突然全く反応しなくなつた僕を、彼女はまた喋ることができると信じて待つていた。

もう無視し続けるのは限界だと思つた。

馬鹿らしいと思う気持ちが勝つた。

またいつもの日々が始まる。

だが、僕は未だにこれが本当に正しかったのかと、彼女にとって良かったのかと、考え続けていた。

了

独り心地

若葉

私はずっと独りだった。

親の顔を知らないし、友達もいない。孤児院に十年ほどいたが、私のように親を知らない子は一人も見かけなかった。

私はずっと孤独だった。

貧しい孤児院では職員もろくに雇えず、院長が一人で経営していた。なので院長とはめったに会えない。年長の人たちが幼い子たちの世話をするのだが、幼い子が多すぎて手がまわらず、大人しかった私は基本的に放置されていた。

「お父さん、お母さん、どこなの……？」

「置いていかないで……」

そう泣きじゃくる子たちを、年長者たちは

「大丈夫、きつとすぐ迎えに来る」

「俺たちがついてるから大丈夫」

と慰めているのを、私は不思議そうに見ていた。

「どうして泣いてるの？」

お父さんもお母さんも知らない私は、ただ純粹にそう思った。それを聞いた年長者が悲しそうな目で私を見ていたが、どうしてそんな目で見られるのかわからなかった。

親がおらず、自分たちより達観している少女を年長者たちは気味悪がった。彼らは年長者ではあるが、まだ子供だった。

こうして私は孤児院でも孤立していた。私はどうして一人なのかわからなかったし、どうしていいかわからなかった。

ある日、孤児を引き取りたいというおじさんが来た。おじさんは隅っこで座り込んでいる私を見つけると、声をかけた。

「君、私と暮らさないかい？」

何を言われているのか、すぐには理解できなかった。しばらくし

ておじさんの言葉の意味を理解した私は、どう返答していいかわからずあたりを見回した。

「あの人誰？」

「あいつ親いないはずだよな？」

「どうしてあいつなんだ？」

彼らの声を聞いて嫌な気分になった私は二つ返事でうなずいた。

男性はニコリと笑って私に手を差し出した。私はそれをギョツとつかんだ。

男性は別室で院長にお金を払うと、私を連れて孤児院を後にした。誰も見送ってはくれなかった。

外に出るのは初めてだった。冬の冷たい風が吹き付け、私は体を震わせた。それに気づいたおじさんは私にコートを着せた。

しばらく歩いて、ふと振り返る。外から見た孤児院はボロボロで、今にも崩れてしまいそうだった。よく見ると孤児院だけでなく、ほかの家屋もボロボロだった。

おじさんは、真っ黒でピカピカな車（この時の私は車を知らなかったので怖かった）に私を乗せた。そしておじさんが乗り込むと、車はひとりでに動き出した。

「まずは自己紹介をしようか。私は畠山。君の名前は？」

「名前は、知らない……ヒトリって呼ばれてた」

「ヒトリ？」

「ずっと一人だったから……」

ずっと一人で隅っこに座っていた私は、ヒトリと呼ばれていた。

畠山さんはしばらく考え込み、そして言った。

「なら、新しく名前を付けてあげよう。君はもう一人じゃないからね」

「名前、ですか？」

「そうだね……美雪、なんてどうだい？」

「美雪……」

「美しい雪と書いて美雪。雪のように儂く、けれど美しい君にピッタリだ」

「美しい？ 私が？ さすがにそれは言い過ぎだと思った。怪訝な顔をしていることに気づいたのか、「ハハハ」と笑って言った。

「確かに、美しいというよりは可愛らしいだね。でも、君は美しい女性になれる。それは私が保証しよう」

「確信めいた言い方だった。私はますます怪訝に思ったが、「すぐにわかるよ」とはぐらかされた。

しばらくすると、外の風景が変わった。閑散とした雰囲気から一変賑やかで明るくなった。

「ここは……？」

「今日から君が暮らす街さ。さあ、家までもう少しだ」

人がたくさんいる。見たこともない華やかな服を着ていて、見たこともない道具が売っている。ここは見たことのないものであふれていて、私は少し興奮してしまっていた。

「あの、あれはなんですか!？」

「あれは本と違って、色々なことが書いてあるんだ。家にもいくつがあるよ」

「じゃああれはなんですか!？」

「あれは携帯電話。遠くの人とお話しができるんだ。私も持っているよ。えつと……ああ、あつた」

畠山さんは携帯電話を取り出して私に見せてくれた。けれどどういうものか全くわからず、困惑している私を見て畠山さんは笑った。私にらむと

「ごめんごめん」

と言って使い方を教えてくれた。でも結局わからなかった。

「着いたよ」

畠山さんはそう言って車を降り、私を抱きかかえて降ろした。

「ここが、今日から君の家だ」

そこはとても大きな屋敷だった。孤児院をはるかに上回る大きさの屋敷は、これまでの道のりで見たどの家よりも大きかった。後ろを見ると、様々な形に切りそろえられた草木が並んでおり、とても遠くに門がかるうじて見えた。

「美雪、おいで」

畠山さんは私の手を取って歩き始めた。私は前を向いてついていた。

「おかえりなさいませ、旦那様、お嬢様」

屋敷に入った私は、不思議な服装（後に執事服やメイド服だと知った）のひとたちに迎え入れられた。聞き覚えのない言葉に首をかしげたが、畠山さんはさっさと歩いて行ったので特に気にしなかった。

階段を上がり、ある部屋に連れられた。

「そこに座りなさい」

と言われたので私はソファに腰かけ、その感触にびっくりした。

畠山さんに笑われたが、私はそれどころではなかった。こんなにふかかな椅子に座ったことなどなかった。

「さて、何から話そうか……まず、私は君の父親だ」

「え？」

畠山さんが私の父親？ お父さん？

「じゃあ、私を捨てたのは……」

「ああいや、捨てたのではない。美雪はさらわれたんだ」

「さらわれた？」

次々と語られる内容に驚きっぱなしで頭に入っていない。畠山さん、いや、お父さんは話し続ける。

「美雪をさらった人はすでに捕まっている。けれど、美雪がどこか

に捨てられたことしかわからなくて迎えに行くのが遅れてしまった。すまない」

「はあ……」

「私のせいで美雪にはつらい思いをさせてしまった……だけでも大丈夫だ。今日から美雪はこの領地の姫様だからね。華やかな人生を約束しよう」

私は物心ついたときから孤児院にいて、親の顔を知らなかった。

ずっと孤児院で過ごしていくものだと思っていた。なので、突然お姫様だと言われても実感がわかかなかった。

「まずは勉強だな。同年代の子に比べてかなり遅れているが、美雪ならなんとかなるだろう。ああ、礼儀作法も教えないと。これから忙しくなるな」

お父さんが何を言っているのか理解できなかった。けれど、とても嫌な予感がした。

その日から地獄のような日々だった。勉強はもちろん礼儀作法、マナー、楽器演奏や絵画などの淑女の嗜みを叩き込まれた。

やがて、ある程度礼儀作法がなってきたとして学校に通い始めた。そこで私は、領主の娘として恥じぬよう振舞わなければならなかった。また、安易に友達を作らぬよう言い含められていた。

領主の娘に恥じぬ成績を修めなければならぬと言われ、必死に勉強した私は学校を首席で卒業した。礼儀作法やマナーも家庭教師から完璧だと言われるようになったし、家にある一通りの楽器はある程度扱えるようになった。絵もある程度上達した。

しかし、お父さんは褒めてくれなかった。それが当たり前、できて当たり前だと言わんばかりの態度だった。家庭教師の社交辞令じみた誉め言葉は全く嬉しくなかった。

卒業して間もなく、お父さんが決めた相手と結婚した。知らない人だったけど、優しそうだな、と他人事のように思った。

彼はどうやら私の親戚らしい。興味はなかったし、向こうも積極的に話しかけては来なかった。

息子が産まれた。とても可愛らしかったけれど、私はあまり会わせてもらえなかった。そもそも仕事や社交で忙しくて会えなかった。

お父さんが亡くなった。葬儀にはとても多くの人 came が、名前しか知らない私は挨拶だけ済ませて一人で隅の方へと移動した。全員が父親を亡くして傷心なのだろうとあまり私に近づいてこなかった。けれど、父親が亡くなったというのに涙は出なかった。

孫が産まれ、おばあちゃんになった。けれども、やはり忙しすぎて孫にもあまり会えなかった。

夫が死んだ。相変わらず涙は出なかった。長く共に生きてきたが、名前くらいしか知らなかったことに気づいて自分でも驚いた。

やがて、私は一日の大半をベッドの上で過ごすようになった。ようやく多忙な毎日から解放されてうれしかった。

考える時間が増えた私は、ある結論に至っていた。
「私をさらったのは、ひよつとしたらお母さんなのかもねえ」

私は一度も母親に会ったことはないし、お父さんも母親について一言も言及しなかった。なのでこれは勝手な妄想だが、領主の娘として何不自由ない、けれども何一つ自由のない生活を送らなければならぬ私を母は憐れんだのではないか。こつそりと私を連れて逃げ出し、適当な孤児院に置いて行ったのではないか。そう思うようになった。

「私は、生きていたのかねえ……?」

私は自分の人生を振り返ってみた。
生まれてすぐにさらわれて孤児院に捨てられ、父親に引き取られ、

勉強漬けの毎日を過ごし、知らない人と結婚して、領主の妻として生きて、そして今はただ寝て起きる日々。

ふと、誰の顔も思い出せないことに気づいた。孤児院の子供たちや院長、お父さん、夫、息子、孫、使用人……結局、私は最後まで独りぼっちだったということだ。

「もしも、ずっと孤児院にいたのなら……たとえ気味悪がられていようとも、人と対等に接することが可能だったなら……なんて、無駄なことだね」

もしもやり直せるのなら……もう少しア歩み寄ろう。

年長者と話をしよう。お父さんと話をしよう。夫と話をしよう。

息子と話をしよう。孫と話をしよう。

「戯言だね……」

私はひっそりと、私にふさわしい最期を遂げた。

了

ある日

猫にゃん

ある日の学校の帰り道、私は橋から川を眺めていた。川の流れに逆らって亀が泳いでいる。一度息継ぎをした亀が次に息継ぎをするまでの時間はだいたい四十秒だ。電車が近くを通ると亀は驚いて橋の影に吸い込まれていったので見えなくなった。橋はわりと低いし、川はわりと深い。落ちても生きていられる気がするので亀をとりに行くことはやぶさかではなかった。寒そうだし服が濡れると嫌なのでやぶさかだけど。私は亀が好きじゃない。嘔むから。

「『ある日』って話、知ってる？」

友達が話しかけてきた。さっきまでの話の続きらしかった。さっきまで私は友達と何の話をしてたんだろう。気になる。

「しらないけど、冷たそう」

「冷たくないよ。エスエフ漫画だから。短編の」

それは冷たくないお話しだった。川の水は冷たいと思う。風が吹いたので私の友達のスカートは揺れた。

「どんな話なの」

四十秒が過ぎた。亀は浮いてこない。

「戦争が始まって、世界が終わる話。一瞬で急にみんな死んじゃうつていう」

「痛そう」

「痛くないんじゃないかな。そんなに時間かからない気がする」

「でも痛くなくさそうだね」

「痛くなくはないのかも」

川の水は冷たいはずなのに亀は浮いてこない。もう息継ぎがいらなくなつたんだろうか。

「そのお話がどうかしたの」

「どうもしないよ。しないけど、例えば、もし今日が世界最後の日だとしたら、ゆっちはどうするかなって」

私が好きじゃない亀が浮いてこないのは好きじゃない。けれど亀は浮いてこない。

「ゆっちって、私のあだ名だったっけ」

「そうだよ」

「へんなの」

「私はかわいいと思う」

かわいそうだと思っただけど、かわいいの推量系はかわいそうじゃなかった。なんて言えばいいのかわからない。不足の語彙力だ。

「ゆっちは、今日で全部が最後だったらどうする？」

「泣くかも」

「悲しそう」

「悲しくなくはないね」

この前、うるさいサイレンの音で目が覚めた朝、このままミサイルの雨が降ってきて世界が終わったらどうしようかと考えたことがある。世界が終わる時は、二度寝する前に友達に電話をしようと思つた。

「むーたんに電話するかも」

「私のあだ名ってむーたんだったっけ」

「今日はむーたんにする」

亀が好きじゃない私は浮いてこない。

「今日が最後なら、私はむーたんに電話するよ」

「じゃあ、私はゆっちを着信拒否にしとくね」

「ひどい」

「最後までい意地悪したいから」

むーたんが笑った。

亀は結局浮いてこなかった。

ウサギの脚

みの

開け放たれた扉から飼育小屋の中を覗くと、そこには凄惨な光景が広がっていた。

ウサギのものである、白くふわふわした毛と、真っ赤な血、そして肉と骨が小屋の中に散らばっていたのである。三羽いたはずのウサギの姿はなく、足元に落ちて肉片になってしまったというのは想像に難くない。

僕は彼らの世話をしている——いや、していた飼育委員だ。いつも通り通学して、日課として小屋の様子を見に来たら、中はこの有様だったのだ。

「ひえっ」

隣にいたもう一人の飼育委員……大榆姿子が、驚いて尻餅をつく。手を貸して立ち上がらせるが、僕も決して平静ではなく、頭の中は混乱していた。

「あああ、安藤！　こここれ、しし死んでるじゃない！」

立ち上がったはいいものの、まだ彼女の足元は覚束なく、その確認の声も震えていて、支えていないとそのままへたり込んでしまっそうだ。

「……と、とりあえず先生を呼ばないと……」

僕は思いついたことを口にする。そのアイデアも、何らかの解決を考えてのものではなく、とにかく誰かにこの場所を任せられただけであったから出たアイデアだった。

姿子を支えて、足早に職員室に向かう。

午前の授業はあまり身に入らなかった。

結局あの後、顧問の先生を呼んできてあとを任せましたが、一先ず状況を検分して、今のところ野犬が変質者の仕業だろう、と結論付けしていた。考えるに、あれほどの惨状だったのだから野犬の仕業、あ

るいは扉が開いていたから変質者の仕業、といったところだろう。自分で扉を開ける犬なんて存在しないから、後者の説が有力なわけだが、わざわざこの学校に侵入してウサギを殺したのは何故だ？

「安藤、飯食うぞ」

クラスメイトの小関に呼びかけられてハツとする。時計を手早く見るともう昼だった。慌てて鞆から弁当を取り出して机に広げる。「大丈夫か？　上の空だったが……流石にあんなのを見て、飯食う気分にはなれないか……」

「あ、いや、大丈夫」

それならいいけどな、と彼もまた弁当を広げ始めた。実際のところは、あの光景が思い浮かぶと気分が悪くなるので、あまり食は進まなかった。

「探偵に頼むのはどうだ？」

「は？」

会話の途中で、小関が思い出したかのように言った。

「なんというか、知り合いにそういう、事件好きなのがいるんだ。

話してみたらどうだ、って大榆に言ったらキレられた」

「それはそうだろ。そんな荒唐無稽な」

「まあ行ってみろ、何か気になることがあるなら意味があるかもしれない」

そう言いながら小関はメモ帳に、最低限僕が理解できる程度の地図を描いて手渡してきたので、受け取ってポケットにしまう。

「……そういうことなら」

僕は放課後、その場所に向かうことにした。心の中にへばり付いている、あの光景の正体がどうしても知りたくなっている。

小関に教えられた場所に向かうと、そこにあつたものは一番分かりやすい表現を使うとして『現代版魔女の家』であつた。

「胡散臭さしかねえ……」

正確には雑居ビルの二階にある事務所なのだが、外はツタが生い

茂り、さらには虫まで飛んでいる。そのくせ、窓はカーテンが閉められ、事務所の中がどんな様子なのか分からない。様子を見る限り、このビルに他の店や事務所があるわけではないようで、廃墟だと言われてもおかしくないぐらいだ。

「うちに何か用？」

後ろから話しかけられ振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。眠たげな眼が、眼鏡を通して僕の顔を眺めている。

「まあいいや、用があるなら上がっていきなよ」

「え、ああ、はい」

彼女は手に提げた買物袋を重たそうに引つ張りながら、二階へと続く階段を昇って行った。僕はその後ろに付いていく。

「中、散らかってるけど、適当に座って」

「あ、はい……」

散らかってる、と彼女は形容したが、それどころではない。あちこち本の山だらけだ。今僕が座っているソファとテーブルだけは何も置いていないので、何故か祭壇という感想を抱く。

「さて、と。自己紹介から行きましょうか。私は大楡雛子。たまに探偵してて、浮気調査とか失せ物探しとかもしてる」

「大楡……って」

相手の飼育委員の苗字だ。そういうえば彼女はこの探偵に頼むことを嫌がっていたような。

「ん、何？ まあ私の名前はどうでもいいでしょ。あんまり面白くないし。というわけで本題をどうぞ」

何か根の深そうな話題のようだったので、提案通りに事情を説明した。

「……そんなわけなんです」

「ウサギが死んだ……ってこれ、全部話してもらって悪いけど、私の管轄じゃないような……どつちかと言えば、警察じゃない？」

「そ、そうですね……」

警察ではこの疑問を解消してくれないだろう。恐らく、先生たちと同じように、鍵を忘れられて野犬に襲われたか、変質者が欲望を満たすために殺した、と考えるはずだ。

「違和感があるんです」

「違和感？」

意を決して、それを口に出した。

「その……ウサギの……脚が少なかった気がします」

「脚が少なかった……」

小屋を何度か見たとき、バラバラになったブーツとしてあるはずの脚が、そこにいたウサギに対して、確実に少なかったのだ。単純に考えるなら、それは持ち去ったのだろうが、理由が分からない。

「……ウサギの脚」

雛子さんは顎に手を当て、考え込んでいる。何か思うところでもあるのだろうか。集中しているようなので、僕も椅子に深く座り、その様子を眺めていることにした。

そうこうして数分経った頃、おもむろに雛子さんは本の山に向かい、そこから一冊の本を取り出した。

「……なんですかその本」

「ちよつとした民間信仰の本かな」

民間信仰。そんなものとこの事件に、何か関係があるのだろうか。彼女はあるページを開いて、こちらに見せてきた。

「まあ要するに、ウサギの後ろ脚は呪物」

「……じゅぶつ？」

「呪いのアイテム。まあ、呪いと言っても使い方次第で幸運のお守りになったりもするけど」

呪い。

唐突に現実味がなくなってきた。

「まあまあ、そんな嫌そうな顔しないで。ここで重要なのは、ウサギの脚に興味があるということだから」

「……ってことは、犯人はそういうオカルトを信じてるってわけ」

すか」

「……それだけならいいけどね」

嫌なことを言う。

そのとき、外から激しい衝突音が飛び込んできた。

「な、なな何!？」

慌てるとやけにどもるのは彼女らに共通のことらしい。

急いで窓に近寄り、外を覗くと、そこにあつたのは大破した車と、壁との間に挟まれた一人の人間だった。

警察を呼び、また外を見ると、雛子さんは事故現場を上げしげと見ていて、何やら合点の行つた顔で頷いていた。僕は戸惑いながらも、様子を見に外に出る。

「この制服、君の学校のだよね」

雛子さんは押しつぶされた死体を指さして、そう聞いた。色々なものが飛び散っているのに、ウサギの時のように、吐き気がしてき

た。それは彼女の言う通り、うちの学校の制服を着た女子だった。しかも、顔に見覚えがある。確か昔同じクラスだった生徒で、名前は岸織、だったはずだ。

「そうですけど……」

雛子さんは大きいため息をつくと言った。

「この子は君の学校の誰かに呪い殺された、と断言しよう」

そう力強く言い放つた彼女の手には、ウサギの脚が握られていた。

呪い、とは。

探偵兼オカルトの専門家、雛子さんいわく、今回のこれは人間の動きに補正をかけるものである、らしい。

例えば、足を滑らせて転んだ先に、車が走ってきて轢かれる、といった具合で、危険に引き寄せられるように動く、と説明していた。ウサギの脚は呪物だと言っていたが、一般的に流通しているもの

は小さな幸運を呼び込む程度の力が関の山である。その手の専門家が加工したものは『持っているとき大きな幸運を呼び込むが、いずれ釣り合いを取るように死んでしまう』もの、『持っている限りは幸運に恵まれるが、手元から離れると不幸になる』もの、など、強い効果を持つが、呪いの側面も強くなるらしい。「最期に持っていたし、今回は前者だろうから、事故死した女の子にウサギの脚を渡した人突き止めてね。できるだけ早く」。

と、別れる前にそんな説明と指令を受けた。

正直のところ、呪いなど今まで信じていなかったし、今も半信半疑だが、人が死ぬ場面を見てしまった。それに、ウサギの脚が関わっているとすれば、調べざるを得ない。

翌日、学校に着くと、クラス委員でもある小関に話しかけられた。

「今日も楠が休みだけど、あいつ本当に大丈夫なのか?」

「大丈夫って……何が」

「いや、楠に相談されたんだ。楠来ないけど大丈夫かなあつて」

楠と楠、僕はあまり親交がないけれど、このクラスでお互い仲のいい女子であることは知っている。所謂、無二の親友というやつだろう。

二人とも大人しめで、休み時間はほかのグループに交じるより二人で話しているという具合だ。なお字面ではパツと見区別がつきにくい。

「楠もいじめられてるみたいでな……なんというか俺がどうこうできる話でもないし、休んでるのも止められるものじゃないしな」

「いじめられてるって……楠っていじめられるようなタイプだったか?」

「まあ大人しいし、どこかのグループに所属してるわけでもないのに楽しそうなのが気に食わないんだろうな……」

感情は醜いなあ、と芝居じみた声で加えた。

そこで一つ疑問が湧く。この想像が合っているとしたら。

「……楠って、誰にいじめられてるんだっけ」

「えっ、それは確か……」

岸織、と小関は言った。その答えで、想像が確信に変わる。

「今日のプリント持っていく担当、決まってるよな。僕が行くよ」
もしかしたら、彼女が犯人かもしれない。

「改めて思うけどなんで大榆がいるんだよ」

「別にいいでしょ！」

何故か、大榆妹、もとい大榆姿子が、楠家の訪問に着いてきていた。雛子さんは連絡はしたが、まだ確信はないので、来てもらってはいない。姿子の方は、オカルト関連には詳しいのだろうか。

楠、と表札のある家に着くと、僕はプリントの挟んであるファイルを脇に抱えて、インターホンを鳴らした。しばらくすると玄関に誰かが来て、扉を開いた。

楠本人だ。バジヤマ姿で、さつきまで床に就いていたようである。

「楠、プリント持ってきたけど」

姿子が僕の持っているファイルを奪って、彼女に差し出した。僕が話す場面だったような気がするのだが。

「あ、ありがとう……風邪引いちゃってて」

「まあ、元気になりなさいよ」

「ちよっと前も楠ちゃんが来てくれてお土産をくれたんだよ」

楠は大体テンションが低いが、楠のことについては嬉しそうに話している。様子を見る限り、精神的に苦しそうではなかったため、本当に風邪を引いているのだろう。

「お土産って？」

姿子が聞く。楠はなんら屈託のない表情で答えた。

——ウサギの脚、と。

「ウサギの脚って……」

「幸運のお守りなんだって。岸織に取られちゃったけど——」
僕はもう、そこからは聞いていなかった。

楠が楠に渡して、それが岸織の手に渡ったのだ。

——つまり、楠は楠を殺そうとしていた？

翌日、楠の死体が学校で発見された。

「飛び降り自殺だったって、怖いね」

「いじめとかあったのかな」

そんな声が学校の中では溢れ返っていたけれど、その自殺の真相は誰も知らない。僕は昨日、楠と別れてから雛子さんに聞いたことを思い出す。

『「君の想像は間違っているよ。楠は楠を殺そうとしたわけじゃない」

「それじゃ、一体何のために」

「簡単なことだよ。彼女は楠を救いたかったんだ」

「岸織を殺そうとしたんですか？ 取られることも想定して」

「そうかもしれないけどね。そんな不確実なこと、信頼できる？ それなら、手放したら不幸になるウサギの脚でも、岸織の鞆の中に忍ばせておけば簡単だった」

「岸織が、楠からウサギの脚を取ったのは想定外ってことですか」

「そうだよ。そもそも、呪いなんて手を使う時点でそんなまじろっ

こしい真似する必要がない」

「じゃあ、楠は何のために」

「人を呪わば穴二つつて知ってる？ 人を呪い殺した者は、相手の墓穴と自分の墓穴、二つを掘らないといけないってこと。つまり、彼女は自分が死ぬことを覚悟していた」

「……………」

「彼女の目的は楠との無理心中だ。楠は恐らく今日中に死ぬだろう」

雛子さんの言った通り、楠は楠との心中が叶わず死んでしまった。

楠は楠が死んでしまったことを悲しんでいた。少なくとも、楠がとるべき選択はこれではなかったはずだと、僕は思う。

人が二人とウサギが数羽死んでも、学校は何事もなく、時間が過ぎていく。世の中の無常、というかそんなものを感じる。それでもこの事件を通して、僕の周りには変化があった。

楠は姿子と仲良くなり、今のところ平穩に過ごしているようで、僕はというと、雛子さんのところで手伝いをさせられている。

これから度々オカルトな事件に巻き込まれるが、それはまた別の話だ。

終

さんしよく

箱庭氏

随分と冷たくなった十月の、よわい朝日にちかちかまたたく赤い尾びれなどを眺めていると、ふと、ちよのことが思い出される。今日もしとしと降る蜘蛛糸の、雨に似ている、といったちよの、かなしい小赤のくちびるが思い出される。朱子の、そのなまめく狸々、一色の播らりゆらりは、ちよの溺れた体液を思い出させる。

城下町の、小さいうちへ住んでいたころ、ちよは私のところへ来た。ちよを紹介したのは、学生時分から悪友、Sであった。

Sがしばしば顔を出すようになったのは、Sより古い十四年来の友人が死んでからであった。友人とはいいが、まだ私の少し幼いときに、夜店で捕まえた、ずいぶん生き残ってしまったて、どうにもしようのなく、かといって、棄ててしまうのはひどく惜しい、そういう金魚である。Sにひとつ、ながく一所にいた小赤が死んだと葉書きを出したら、しよぼくれていると思われたのか、なにもあの金魚だけが金魚ではないと、駆付けけたSなりの、やや乱暴なぐさめを受けた。いや、いや、そんなに落ち込んでいるわけではないだけだね。Sの必死さに緩む口の端を隠しもしないまま、いったなら、いいが。ちよつと不満そうに返したSは、いまひとつ信用していないぞ、とでもいいたいのか、折にふれて、足を運んでくれた。

きみ、見合いをする気はないか。藪から棒に、Sのいつてきたのは、秋の長雨の、もう肌寒い時分であった。曰く、この間知り合ったひとがひとりだつてんで、きみもひとりよりずっといいだろう。なんだかんだいって、私を気にかけての言葉だったから、むげに断ることもできず、とかく、あつてみることにした。そのひとは、ちよと名乗った。ちよは、きれいだった。透明をまとうつたうつくしいひとだった。口を開けば、西のなまりで、見た目より幼くきこえた。

鳥なら文鳥、魚なら、私のよりもつと上等な金魚だろうと思った。この日から、ふたりして、手狭な家へいることが多くなった。それ

は、婚約者という言葉でさえ、照れくさいものだった。

その、文鳥か、金魚か、かろやかなひとは、出不精の私を、よく連れだした。色づけばもみじ、降りだせばゆき、散りだせばさくら、果ては、Sからの、私宛の、ぜび飼っている鳥を見に来い、の葉書きまで、きちんと把握して、往くのであった。Sの鳥というのは、白文鳥で、手乗りの、まだ若いつやつやしたのだった。ちよは、籠の内、にゅつと飛び出た二本の止まり木を往つたりきたり、天井から下がったぶらんこでゆらゆら揺られて、水をびちり跳ね上げ、焼き物の器をかちかちいわせて粟か稗かを食つたりするのを、熱心に、じつと眺めていた。ちよが文鳥にくぎづけで、そのあいだ、私とSとは、ふたこと、みこと、あれだけ慣らすのは大変だっただろう、いや、あれは元来が人懐こいから、きみの思うほど大変じゃなかつたさ、そんなものか、そんなもんさ、どうだい、きみも飼つてみないかい、いきものはだめだ、いつ殺してしまうか知れない、自信がないよ、なにいつてるんだ、十何年か金魚と一所だったんだらう、あれは、たまたま、あの水槽とあの金魚が合つただけだよ、そんなもんか、そんなものだ。あとは、Sは畳の上でごろごろ、私は鳥とそれを観察するちよとをぼんやり眺めていた。ちよが、ようやく小鳥の見分に満足したのは、夕陽が朱墨をこぼしたとき、あら、もうずいぶんで、ごめんなさいね。Sか鳥か私か、誰に向けてか判然しない調子でいった。簡単にいとまを告げて、帰途につく。夕焼けに濡れた、ちよの横顔を眺めて、熱心だったね、ぼつり眩いた。まあ、そんなに、小首をかしげるのは、やはりあの白い鳥に似ていた。

「ああ、熱心、熱心だったよ」

私は、からかつて、

「きみ、文鳥なんじゃあないか」

「なんで？」

私は、まさかまつたくでまかせとはいいいがたく、ちよつと口ごもりながら、

「だって、ねえ、あんなに熱心なのは、久方ぶりに、似た境遇のもの話を聞けたからじゃないのかい」

「やわあ」

ちよは怒るふりを見せて、

「ね、それだけ？」

ちよは、私のごまかしをすぐに見透かして、仕返ししようとしているのだ。私は、もつと、しどろもどろになりながら、

「文鳥はちよよ鳴くしね」

「そうね」

ちよは、いたずらっ子の微笑みで、

「じゃあ、あなた、あなたのほうが、よっぽど文鳥やね」

私は顔を赤くした。

私の家が、もう少し手狭になったのは、青い長雨のころだった。

小雨の続くある日のことだった。私は、朝から二階へ閉じこもって、じめじめ降る雨をやり過ごしていた。午後になって、ふと気が付くと、雨は上がって、久々の日が、重い土にさしていた。ちよは、二階へ上がってきて、雨も晴れて、からりとしていいから、買い物をしてきたいといった。私が返事をすると、子どもの笑顔で降りて行ったが、大分たつても、なかなか帰ってこなかった。ちよがとぼとぼ帰ってきたのは、重い雲の端々を、すこしばつかしの夕日が染めるところだった。硝子の入れ物をさげて、しょんぼりと、これを持ってほしいの、いえ、いいえ、ちよつと苦しくなっただけ、弱弱しく、いいわけをならべた。蒼い顔をして、ごまかせるわけがないだろう、いうと、ちよはさみしく笑って、

「あなたには、うそ、つけへんね」

「医者に行つて、すぐ見てもらった方がいい」

硝子の入れ物を受け取って、いった。気が気でなくて、震えるちよを支え、しっかりとしろ、ともいった。

「お医者、ええの。横に、なりたい」

私は、押し入れから布団を出して敷くと、ちよはそこへくずおれ、

ふいに血を吐きだした。その時の私の驚きは、私から言葉を奪った。ただ、ちよの背を撫でてやるしかできなかった。掛け時計の針がちよち響いていくぶんか、私は、少々の落ち着きを取り戻すと、新しい布団を敷いて、軽い体を抱え移してやった。ちよは、いつの間にか眠っていた。はかない呼吸と、青白い肌との、蒼ざめた眠りを、入れ物の、三つ尾の真つ赤と、一晩中、見ていた。

ちよは、その次の朝、医者にかかった。結核だろうといわれた。

私は、やつぱり言葉が出なくて、いつの間にか、随分細くなつてしまった手を、指を、握っているしかなかった。医者は、いくつか薬を置いて、こまごま何かをいって、帰った。私はぼうつとして、血でちよつと汚れた畳を眺めていた。ちよは、そんな私を見ていたらしかったが、かすれた声で、あかこちゃん、あかこ、朱子は、尋ねた。朱子、昨晚の入れ物、その中身と直感した私は、大丈夫だ、ほら、とちよの前まで寄せてやった。ちよは、するり、その腕を伸ばして、硝子鉢に触れた。

「あたしね、」

瞳と指先で、赤いゆらめきを追う。

「更紗のより、狸々のが好きなの」

「更紗？」

「錦鯉みたいな、赤と白のまだらが更紗、赤一色が、狸々」

「へえ。こつちのほうが金魚らしくていいや」

「あーかい、まつかの、しょーじよのきんぎよ」

楽しそうにくすくす、あかい、まつかの、しょうじよのきんぎよ、くすくす笑う。

朱子のからだの赤いのは、ちよの吐いた血の赤いせいだ、ちよの吐いた血の赤いのは、朱子のからだの赤いせいだ、と、馬鹿なことを思った。

私は、ちよのそばへいることが多くなった。その時分請けていた挿絵の仕事も一階でやった。ちよは、私の邪魔になることを嫌がったが、仕事の滞りのないことを見、私がそばにいたいだけというの

を聞きいてか、次第になにもいわなくなつた。布団へはりつけにされたちよの慰みは、あの狸々ひとつだつた。病氣しそうにもなつたが、初めて物の本を読んで、なんとか予防した。ちよは、よかつたねえ、よかつたねえとしきりにいつた。ありがとおね、ともいつた。私に向けてか、金魚に向けてか、やはりわからなかつた。

夕暮れ、ちよと出会つた日のような、肌寒い雨の日、ちよは、ずいぶん憔悴した声で、私を呼んだ。あのね、近寄つた私の手を取り、ついぞしなかつた、指を絡ませ、いつくしむ手つきで、絵の具のしみた、私の皮膚を撫せて、

「氣い付けてね、病氣せんように」
「どうしたの」

急激に押し寄せる不安に、ちよの掌をきゅつと握つて、

「ねえ、どういう意味？」

「お蚕さん、飼つたことある？」

「なんの話だい」

「見たことある？」

答えてほしいと、声色でいわれて、当惑した、こもつた声で、

「見たことは、ある。触つたことも。でも、いきものを飼つたのは、金魚だけだ」

「そう。桑の葉つば、食べてるんは？」

「ない」

「ね、この病氣ね、その音がするの」

ちよは、窓硝子の外に目をやって、

「雨の降る音に、ちよつと似てる」

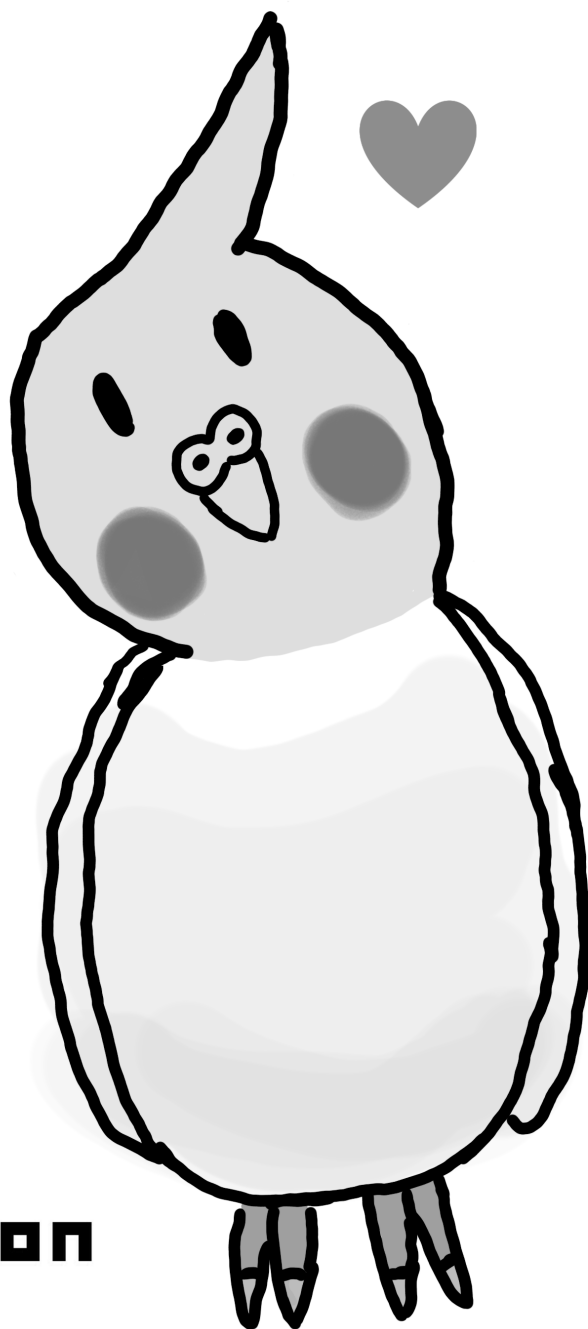
いよいよ私は、なにもいえなくなつて、うつむいて、ちよのさきやきを聞いているばかりであつた。だからね、雨の音に騙されちゃ、やあよ、しつかり、氣い付けて、ね、顔をのぞきこんだちよの赤い口元は、泣きだしてしまいそうな、微笑みだつた。わかつた、大丈夫だからと、虚勢を張りたくて、ちよの指を撫でた。蒼白の、滑らかで、ひんやりしたそれは、むかし触つた蚕のからだを思い出させ

た。

くるくる踊る、朱子が死んだら、きつと、近くに眠らせてやろうと思つている。

了

イラスト作品



Akkodon



悪戯好きのヴォルフガング



Äkkodon

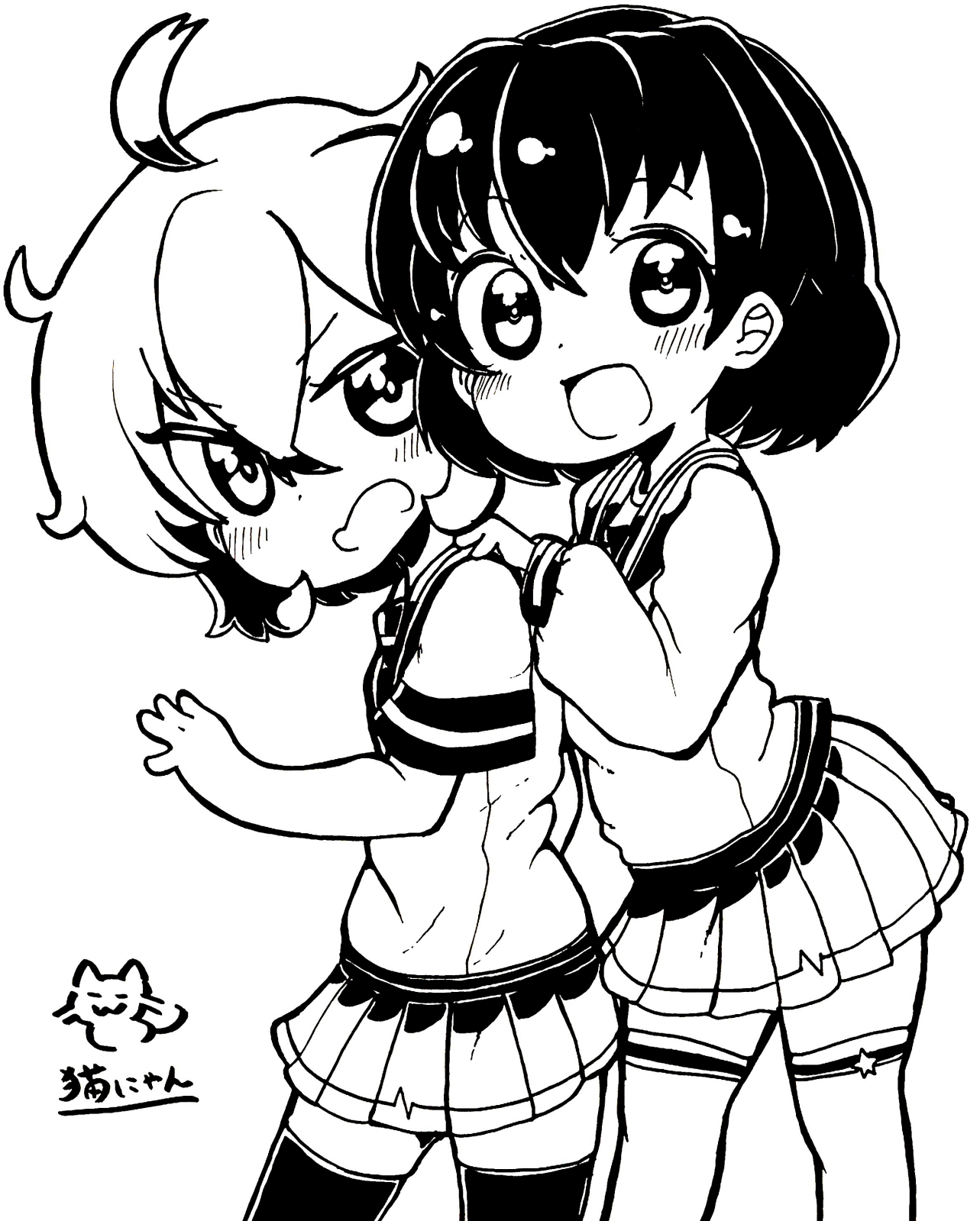


アント





如月




猫にゃん



猫にゃん

あとがき

きな粉もち

こんにちは！会誌の編集を担当しております、きな粉もちと申します。現代視覚文化研究会2017年秋会誌『なけなしのかね』を読んでくださりありがとうございます。いかがでしたでしょうか？

まえがきでも書かれていましたが、もう代替わりの時期なのですね！ちやうど私もこの時期に、次の会誌の編集を担当することに決まりました。あれからもう一年が経つということなのか!!！いやー一年なんてう会誌の編集を担当してもう一年なのですね!!！いやー一年なんてあつというまですね(笑)。ちなみに今年には編集の代替わりはない・・・のかな？とりあえずまた一年間編集頑張りますっ！

もうすつかり秋になりましたね！秋になると今まで暑かった日が急に寒くなったりしますよね？今これを書いている日はめっちゃくちや寒いです。キーボードをうつたために出ている手がとても冷たいです・・・。なんというか、肌が空気に触れているという感覚がわかるほど冷たいです(笑)。今でこんなに寒いのにまだ冬があると考えると、冬を越せるのか本気で心配になります。とか思っていたら急に暑くなったりするんですけどね・・・。体がもたないです(笑)。どうかこれを読んでいる方も風邪をひかないようにお気をつけてください。

うう寒い・・・毛布を被ってても寒い・・・お布団が恋しい・・・(泣)。

改めまして、現代視覚文化研究会2017年秋会誌『なけなしのかね』を読んでくださりありがとうございます！またお会いできることを願っております。それでは！